

授業概要

多文化共生社会におけるより良い保育のあり方を探る目的で、多文化保育に纏わる概念的な枠組みを把握し、日本国内におけるマイノリティへの支援の現状と問題点を検討する。外国人母子という総論的な視点ではなく、それぞれの文化的な背景を尊重しながら、いかに保護者のニーズを捉え子どもの発達を支援していくかということを考察して行く。また世界各国の保育制度と子育て支援を各論的に学びながら、文化的調整が何故必要となるのかを知り、翻ってマジョリティである日本人の保育のあり方を再検討し、今後の多文化共生社会における保育者の役割を見出して行く。

授業計画

第1回	ガイダンス(民族・文化とは何か)
第2回	在日外国人を取り巻く環境(人口動態、法的環境)
第3回	現代の多文化共生社会に向けた課題
第4回	多文化共生社会における文化的調整(バーンステインのコード理論)
第5回	多文化共生社会におけるアンチバイアスカリキュラムⅠ(理論)
第6回	多文化共生社会におけるアンチバイアスカリキュラムⅡ(事例考察)
第7回	異文化接触時の子どもの発達Ⅰ(総論)
第8回	異文化接触時の子どもの発達Ⅱ(文化的再生産とハビトゥス)
第9回	異文化接触時の子どもの発達Ⅲ(保育者の具体的な配慮)
第10回	日本における多文化保育の実践例
第11回	諸外国の保育制度と子育て支援の現状Ⅰ(スウェーデン・フィンランド)
第12回	諸外国の保育制度と子育て支援の現状Ⅱ(フランス・イギリス)
第13回	諸外国の保育制度と子育て支援の現状Ⅲ(カナダ・オーストラリア)
第14回	諸外国の保育制度と子育て支援の現状Ⅳ(中国・韓国)
第15回	今後の多文化保育推進にむけた展望
第16回	定期試験

到達目標

- 多文化保育に関する過去の実践と問題点を探り、日本以外の文化的背景を持った子どもと日本文化を背景に持った子どもが共により良い保育環境の中で発達して行くための保育者の役割を理解できる。
- 諸外国の保育の現状を通じて保育・教育の多様性を知り、普遍的な保育の質を捉え直すとともに、今後の日本の保育の構造を考察できる。

履修上の注意

授業内の小レポートや、授業外で行う課題を課すことがある。
私語を慎みながら、発言・質問等は積極的に行うこと。
著しい私語等で授業環境を乱す者については、退出を命じる場合がある。

予習復習

予習として配布資料の予告された箇所を授業前までに通読すること。
当該テーマのより良い理解のために、授業内で紹介する参考文献や資料による復習をすること。

評価方法

授業内でのディスカッションや小レポート(20%)、定期試験(80%)によって評価する。

テキスト

咲間まり子・他『多文化保育・教育論』、株式会社みらい (ISBN-13: 978-4860153199)